

# 医師の「役割」考える

## 僧侶が医学部で異色の授業

慶応大学の医学部に、お坊さんによる異色の授業がある。仏教を語るのではない。治療の手が尽きたとき、医者は何ができるのか……。そんな答えのないテーマを考えてもらう。患者や家族の揺れる心を受けとめることの難しさと大切さを伝えている。

(磯村健太郎)



語りかける戸松義晴さん  
＝慶応大学医学部、高波淳撮影

「私、1年前に検査して何も見つからなかったんです。急にそんな……。おかしいです！ どうして見つけれなかったんですか」

「申し訳ないです……」

「謝らないでください！」

東京都新宿区の信濃町キヤンパス。「がん」を告知された女性の大声が教室に響いた。白衣姿の杉山和俊さん(21)の声は消え入りそうだ。「セカンドオピニオンは……」

「そういう事務的なことじ

「やなくてー」

3年生向け自主選択科目のひとつ「期待される医師像とは」。そこでのロールプレイング(役割演技)のひとつ。まだ。受講者は9人。緊張感が漂うなか、講師の戸松義晴さん(55)だけは笑顔で見つめている。

設定は、女性の全身にがんが転移して余命6カ月。医師役の学生は患者の心を察しつつ、事実を伝えなければならぬ。台本のない疑似体験である。患者役の三井美保さん

## 「共感・共苦の大切さ 伝えたい」



(39)はプロの役者だ。不用意な言葉にいらいらしたり、本気で怒ったりする。

なんとか終えると、杉山さんは深いため息をついて「無理だよ」とうなだれた。

「頭ではわかってるんですけど、患者さんの気持ちを思うとか、真摯に向き合うとかいったことは」

みんなで感想をぶつけ合う。一人が「声が暗すぎて不安にさせた。もっと自信を持って言うべきじゃないかな」と言う。戸松さんは「本当に難しいね。マニュアルや正解はありません。医師との間に信頼関係があるかどうかによ

っても、対応は違います」。別の学生は、もう治療のしようのない患者に「それでも治したい」と言われたらどうすればいいのかわからない、と述べた。戸松さんは「そこは本質的な問題です」と、よく考えるよう促した。

「医師の役割とは何でしょう。病気を治そうとするだけか、それとも死を含む全体的な過程まで引き受けようとするのか」

戸松さんは東京都内にある浄土宗の寺の住職である。多くの死に立ち会ってきた。読経中に涙がこぼれることもある。学生に伝えたいのは、仏教の根っこにある共感・共苦の思想だ。他者の悲しみを自分のものとして悲しむ。それは頭で理解することではない。困難な体験を乗り越えるたびに磨かれる感性だと信じている。

「死が現実味を帯びた人にとって大事なものは、だれかが自分の思いをわかってくれているという実感です。治療を超えて医師にできることは沈黙だけかもしれない。手を握るだけかもしれない。医師は患者の心の一番深いところに触れ、患者には医師の心を感じてもらおう。最終的には、人をたたいて怒る俳優(中)に、医師役の学生(左)は戸松さんと同じ

格と人格の触れ合いが必要になると思っています」

戸松さんは89年から3年間、米ハーバード大学の神学大学院に留学。生命倫理や医療倫理の問題に関心をもち、医学部の授業にも出た。疑似体験の手法はそこで学んだ。

医学教育は、知識の詰め込みにかたよりがち。そうした反省もあり、慶応大学は05年から戸松さんを招いた。3年生はまだ臨床実習前で、実際の患者は診ない。その段階で、知識ではどうにもならないものがあると知らされる。

「臨床に入るとある程度、コミュニケーションの技術は身につきます。でも、大切なものを忘れちゃうんですよ」と話すのは6年生の出野智史さん(24)。今でも時間が許せば出席している。「この授業で学んだことで、患者さんの本当の思いは……と立ち止まって考えることができると思うんです」

授業ではほかに、生後3週間の子に先天性の心疾患が見つかり、治療できないことを親に伝える設定もある。ある学生は疑似体験をしながら、母親役の女性と一緒に泣きそうになった。

それを見て、戸松さんは言った。「あなたは今、つらさを受けとめて共感したんだね。彼女の心によく近づいたと思うよ」